

はじめに

2021年11月、梶山女学園大学図書館4階の歴史文化館に、絵巻などに混じって、個人蔵の奈良絵断簡、A 伊勢物語絵8枚、B 源氏物語絵9枚が展示された。奈良絵とは、室町時代後期から江戸時代前期に描かれた、絵巻や絵本冊子の絵をいう。これらの奈良絵断簡は、絵だけが切り離されたものなので、順番も乱れ、物語のどの場面か特定するのに苦労した。

ことに源氏物語絵は、平安朝貴族社会の長編の恋物語なので、類似した情景が多い。そうした中で、ほぼ確実に特定することが出来たのは、奈良絵の多くが、江戸前期 17 世紀半ばに出版された絵入り版本に基づくことが多いからである。これらの源氏物語絵は、慶安3年(1650)跋、承応三年(1654)刊の山本春正「絵入源氏物語」をふまえている。「絵入源氏物語」の絵は、物語本文をふまえた挿絵だから、そのモチーフによってどの場面を描いたのかが判明する。

以下では、展示された伊勢物語絵と源氏物語絵について、物語の順に沿って、それぞれの絵の物語内容を解説する。

A 伊勢物語絵

『伊勢物語』は、『古今和歌集』や『百人一首』の歌の作者として有名な、在原業平をモデルとした昔の「男」を主人公とした短い歌物語の集成である。通行の藤原定家筆 125 段本により、8 枚の伊勢物語絵に物語の展開の順に番号を付して述べる。

①第9段。東下りのうち、現在の知立にあたる三河の八橋で、「かきつばた」の各文字を句の上に置いて歌を詠んだ場面。「からごろも きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる たびをしぞ思ふ」と、妻を都に残した東国への旅の思いを詠む。左上のジグザグの板が八橋で、その下にカキツバタが咲いている。木のもとにまん幕を張り、二人の友人と向き合って食事のお膳を前に座る白に水色の服の男が業平にあたる。

②第12段。武蔵野に逃げこもる男女に、追っ手が火をかけようとする。「人の娘」を盗んで「盗人」とされた男と、自分が草むらに隠っているから、どうか焼かないでという女の歌。「武蔵野は今日はな焼きそ 若草のつまもこもれり我もこもれり」。盗み婚という現代ではかけ落ち婚の失敗。古語の「つま」は男女ともに愛する人をいう。

③第23段。「筒井筒」と井戸で幼い恋の出会いを实らせ結婚した男女が生活に困り、男は金持ちの女に通う。すなおに送り出す妻が、自分の留守に浮気しているのかと、庭の植え込みに隠れて伺う。自分を気遣って「風吹けば沖つ白波立田山 夜半にや君がひとり越ゆらむ」と詠んだので、夫婦愛を再確認したという。平安朝の貴族たちは、事実上の一夫多妻が多かったから、生活のために金持ち女と結婚するのも現実的だった。

④第51段。むかし、男が、人の家の庭に菊が植えてあったのを見て、「しっかり植えた菊は秋に必ず咲くだろう。花は散っても根は枯れないだろう」と歌を詠んだというだけの、短い段。平安朝中期、十世紀に、菊は中国から入った貴重な花だった。

⑤第 66 段。難波、今の大阪の海を兄弟や友達と見て、「今朝見る難波の海岸ごとに、この現世をつらいと思って渡る舟なのだろう」と歌を詠んだ。「海」とつらいと思う「憂み」を掛け詞にしている。

⑥第 69 段。伊勢の齋宮に使者として訪れた男の部屋に、なんと齋宮が夜に忍んで来たという場面。「君や来し我や行きけむ 思ほえず 夢かうつつか 寝てかさめてか」と、翌朝に齋宮が歌をよこした。あなたが来たのか私が行ったのか、夢だったのか現実だったのかわからないという。齋宮は天皇の代わりに神に仕える未婚の皇女で、恋愛はタブー。恋のタブーを犯す高貴な男女のテーマは、源氏物語へと通じる。

⑦78 段。山科の宮の滝を見つつ、美しい石に付けた歌で、「これでも不十分ですが、色の見えない私の忠実な心をこの石(岩)に代えさせていただきます」と詠んだ。「色見えぬ心」を美しい石(岩)として表現している。

⑧第 81 段。左大臣源融(とおる)の豪邸で、菊の花が移ろう(変色する)のを見つつ、徹夜で酒を飲みつつ音楽会を催し、歌を詠んだ。「いつの間に塩竈にきたのだろう。朝凧に釣りをしている舟はここに寄ってほしい」という。東北の塩竈の海岸に見立てたのは、源融が河原院という京都の豪邸の庭の池に、日本海から海水を運ばせて入れたからだという。絵の左上と下に見えるのが、その風流を極めた池の水。

B 源氏物語絵

源氏物語の前編の男主人公は光源氏、後編の主人公は薫と匂宮の二人となる。これらの男たちと関わる女たちこそが主人公だともいえる。54 巻の大長編物語なので、絵の数も膨大にあり、類似した場面も多い。展示中の 9 枚のうち、4 枚が光源氏の物語、5 枚が宇治十帖の薫と匂宮の物語にあたる。

①空蟬巻。空蟬が継子にあたる軒端萩と碁を打つのを、光源氏が覗き見ている。赤い衣の少年は空蟬の弟の小君。この夜、光源氏は空蟬を求めて寝室に入るが、空蟬は軒端萩を残して、着物を脱ぎ置いて逃げてしまう。その着物が蟬の抜け殻みたいだというのが、「空蟬」という巻名と人物名の由来。空蟬は軒端萩の父にあたる老人の後妻であり、光源氏との身分差ゆえに拒み続けた。

②若紫巻。光源氏が自宅に連れてきた若紫の少女にお習字を教えている。お習字は「手習い」といい、琴の演奏とともに、和歌や恋文を美しく書くことが、貴族女性の教養だった。恥ずかしがって隠した若紫の歌を見ると、「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかな いかなる草のゆかりなるらん」とある。光源氏が恋する藤壺の姪ゆえに「草のゆかり」と書いた歌をふまえて、私はどんな「ゆかり」かわかりませんと記した。亡き母桐壺更衣に似るという藤壺の姪のこの少女が、やがて光源氏の最愛の妻「紫上」へと成長する。

③須磨巻。都で政治的に追い詰められ、須磨へと亡命した光源氏が、自由に空を飛ぶ雁の群れを見て、うらやましく思っている。雁の下に煙が出ている田舎家は塩を焼く所で、煙の左の柴は、海水を煮詰める薪。

④も須磨巻。光源氏の家に雷が落ち、炎が燃え上がって人々が慌て騒いでいる。黒い雲の中の雷は、依屋宗達の風神雷神図と同じように、丸い太鼓を打ち鳴らす。その顔はカラス天狗のよう。雷が落ち暴風雨に襲われたのは、この直前に、光源氏が自分は無実だと海辺でお祓いをした結果だった。その罪は秘密だが、光源氏は父桐壺帝の妃藤壺と密通し、生まれた子を弟の皇太子とし、やがては天皇に即位させてしまう。

光源氏の〈光〉の栄光は、秘められた罪の〈闇〉と裏腹だった。この夜の夢に亡き父桐壺帝の亡霊が現れ、明石に移るよう告げる。明石入道の娘と結婚した光源氏は、やがて都に復帰して権力者となる。

⑤は、12巻めの④須磨巻から、48巻めへと飛んで早蕨巻。薫が宇治を訪れ、中君と歌を詠み交わす。二人が見る庭の紅梅の木には、鶯が描かれている。薫は「袖ふれし梅はかはらぬにほひにて 根ごめうつろふ宿やことなる」と歌う。恋する大君と死別した薫が、妹の中君への恋情を、同じ梅の花に託している。大君はもともと妹を薫と結婚させようとし、薫は大君を得ようと中君を匂宮に譲ったのだった。

⑥宿木巻。匂宮は夕霧の六の君を正妻として通い、中君は月を見て、「山里の松のかげにも かくばかり身にしむ秋の風はなかりき」と詠む。宇治の山里の松の陰でも、これほど身にしみる秋風は吹かなかったという嘆き。女房たちは、月を見るのは不吉だと、竹取物語をふまえて心配し、同情した。

⑦浮舟巻。匂宮は宇治で浮舟と愛し合い、男女が寄り付す絵を描いて、逢えない時はこれを見ていてほしく、いつもこうしていたいと言い涙を流した。すなおに歌を書き、応じてくれる浮舟を、匂宮はたまらなくかわいいと思う。

⑧も浮舟巻だが、⑦から状況は一変した。薫は浮舟を都に迎え取ろうとし、下人たちに命じて、匂宮を近づけぬよう、宇治の邸を警備させた。匂宮は供人に連れ出させた侍従という浮舟の女房から事情を聞き、田舎家の前の地面に座っている。犬たちに大声で吠えられるのも恐ろしく、なすすべもない。

⑨手習巻。⑧の場面のと、浮舟は、薫と匂宮という二人の貴公子から愛される三角関係に追いつめられ、宇治川に入水自殺しようと思いつめた。河原で気を失っていたのを、通りかかった横川僧都とその母・妹尼の一行に助けられ、出家した。

⑨は、尼姿の浮舟が、若い尼に軒先の紅梅を折り取らせ、「袖ふれし人こそ見えね 花の香のそれかと匂ふ春のあけぼの」と歌を詠む場面。「袖ふれし人」はやはり匂宮であろうが、出家した浮舟は男と無縁な生き方を選んだ。ところで、この絵のようにきれいに頭を剃った浮舟の絵は、他に例をみない。平安朝の若い貴族女性は、出家した「尼そぎ」でも、短くて肩、長ければ腰のあたりまで髪を残していた。

ビデオ解説では、浮舟を小舟に乗せて匂宮が対岸の家に連れ出す場面の源氏絵を付した。王朝貴族女性の最大のチャームポイントが、身長より長い黒髪だった。その具体例であるとともに、「浮舟」という呼称と巻名が、「このうき舟ぞゆくへ知られぬ」と運命を予感した表現によるためであった。

以上で、伊勢物語 8 枚と源氏物語 9 枚の、展示された断片の奈良絵の説明は終わる。

源氏物語の光源氏の物語は、在原業平をモデルとした伊勢物語の男の物語を引用しふまえることによって成立していた。共通するのは、「色ごのみ」という、美男で和歌や音楽など芸術の才能もあり、多くの女性との恋愛に生きたことだった。たんなる「好色」ではない。

伊勢物語や源氏物語は、室町時代にはお能の素材ともなり、江戸時代にも、主に女性たちの和歌と結びついた古典の教養であった。美しい奈良絵本冊子の挿絵として、完全な原型のまま残された作品も、海外を含めて少数だが残されている。数百年のうちに、絵だけが切り離されたこうした断片もまた、いとおしく、また楽しい。